

園番号 (706)

## 令和6年度 奈良市立帯解こども園 研究実践概要

園長名 岡本 和美  
全園児数 86 名

1. 研究主題「あー楽しかったあ」と心が満たされるこども園を目指して  
～子どもの豊かな遊びや生活を支える保育者のまなざし～

2. 研究年度 初年度

### 3. 研究主題設定理由

前年度までの課題を基に、子ども達皆が心満たされ、「あー楽しかったあ」と園を後にするためには、その感情を尊重し、安心感やポジティブな体験を提供することが重要であり保育者のまなざしやかかわりがその柱となっているのではないかと考えた。クラス職員間で子どもの姿を共有しながらどのような支え方をするかを話し合い、思いを合わせていくことにねらいを置きながら研究を進めることにした。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

「あー楽しかったあ」と心が満たされるために、子どもの豊かな遊びや生活を支える保育者のまなざしやかかわりについて保育者がどのような視点でかかわるべきか。またそのかかわりがどのようにこどもの発達を支えるのかを考察する。

#### ②研究の重点

- ・研究主題について職員相互の共通理解を図り、具体的な取り組みの方法を探る。
- ・子どもの姿や行動の変化にかかわる環境構成・保育者の援助の在り方を探り、それを基に日々の教育や保育に取り入れる。

#### ③活動の方法

- ・日々の教育・保育の中で環境構成や援助の仕方について保育者が迷ったり、悩んだりしている場面の写真を用いて具体的な方法を提案し、クラス職員で共通理解していく。保育者のまなざしとその実際のかかわりにおける認識と行動の齟齬を明確にし、それを埋めるための方法を研究する。
- ・1年を通してPDCAサイクルの循環を意識し、クラス職員間の思いを合わせていく。
- ・各実践事例については子どもの心が満たされた姿、環境構成・保育者の援助という項目で分類し考察した。

0歳児 5月 「立っちできるよ！」

#### 【クラスで大切にしていること】

- ・愛情豊に応答的にかかわる中で、保育者の事を信頼し安心して思いや欲求を喃語や仕草、指差しなどで伝えようとしている姿をしっかりと受け止める。

ハイハイやつかまり立ち、伝い歩きで移動していたA児が一人で立てるようになってきた。いつもは、棚につかまり立ちをして、両手を離して、立とうとする姿を保育者が様子を見ながら「立てるかな?」「おととと・・・」「どし～ん!」「おいしい～!」など、やり取りしながら楽しんでた。この日は、保育者と目が合うと、A児はニヤリと笑いながら、ゆっくりと床に手をつき、転びそうになりながらバランスを取って、一人でそ～っと立ちあがった。保育者が「Aちゃん、すごいね!一人で立てたね～」と言い、手を叩いて喜ぶと、A児も手を叩いて喜ぶ。バランスを崩して尻餅をついても、また床に手をつき、ゆっくりと立ち上がって嬉しそうに大きな声を出して喜んだ。

(考察)

- ・自分で立ち上がる事ができた喜びを保育者に共感してもらうことで、安心感や満足感などの気持ちが高まり、もう一度立ってみよう!という気持ちに繋がった。
- ・周りの大人や友達が楽しそうにしている姿を見て、「自分も一緒にしたい」「真似したい」「見てほしい」という気持ちの芽生えや、楽しさを共有することで人とかかわる楽しさ、心地よさを感じることができた。

1歳児 12月 「どうぞ」

【クラスで大切にしていること】

気持ちを満たしたり、安心感をもって過ごせるようスキンシップをたくさんとったり、互いの気持ちを代弁し簡単な言葉を知らせることで保育者と仲立ちのもと、友達とかかわって遊ぶことを楽しめるようにする。

A児は机に座り、素材で見立てたご馳走を食べようとしている。そこへジュースをもったB児が来る。A児はジュースが欲しいのか、指を差して「んー」と声を出す。しかしB児は「あかん」と言って体の後ろに隠す。A児は保育者に視線を送る。保育者が「Aくんも欲しいの?」と聞くと、A児は頷く。「ちょうだ言ってみる?」と両手を出し仕草を見せながら聞くと、A児も同じように両手を出し「ちょうだい」と言う。B児は「どうぞ」と言って、A児の近くにあったコップにジュースを注ぐ真似をする。A児はB児にお辞儀をし、満足そうな表情でジュースを飲み始めた。

(考察)

- ・発語が少ないA児であるが、保育者が気持ちを代弁したり、仕草を交えながら言葉を知らせたことで、気持ちを汲み取ってもらえた満足感をもち、それが簡単な言葉や仕草でのやりとりに繋がった。
- ・「ちょうだい」という簡単な言葉でのやりとりがB児の気持ちを満たし、A児にジュースを注いであげようとする姿に繋がった。

2歳児 10月 「もっと高くして!」

【クラスで大切にしていること】

- ・子ども一人一人の楽しんでいる姿を見取り、子どもが「やりたい」と思える環境の構成をする。

巧技台の上からジャンプして遊んでいる子ども達。一人でジャンプするのは怖くて保育者と手をつないで跳んだり、高く跳んだり、遠くまで跳んだり子どもによって跳び方は様々。高く跳びたいA児のために、保育者がタンバリンを持って横に立つと、タンバリンをめがけてジャンプするA児。何度かジャンプしているうちに、「もっと高くして」と言い、高い位置にあるタンバリンをめがけてジャンプしたが、届かない。「おいしい!もうちょっとやったなあ」と保育者が声をかけると、「もう一回!」と再度チャレンジする。しかし、何度挑戦してもなかなか届かなかったので、保育者が少しタンバリンを低くしようとしたが、「あかん!もっと上」とどうしても高いところでタンバリンを鳴らしたいようだった。そこで、A児は、高くジャンプするのが得意なB児に「Bくん、これタッチできる?」と声をかけると、B児は「できるで」と勢いよくジャンプし、ぎりぎりタッチできた。「すごい!」と目を輝かせているA児。「A君もできるよ」と保育者が声をかけると、

また繰り返し跳び始め、やっとなんぼんをタッチすることができた。「やったー！できた」と保育者とハイタッチして喜んだ。

(考察)

巧技台を跳ぶという遊びの中でも、一人一人が楽しいと感じているところを見取り、その子に合わせた援助をしてきた。高く跳びたいA児の思いを満たすためになんぼんを用意して音を鳴らせるようにすることで、もっと高く跳びたいという意欲に繋げることが出来た。なかなか届かない時も、そばで一緒に悔しがったり自信がもてるように応援したり、思いに寄り添うことで、何度も繰り返しやろうとする姿につながった。

3歳 9月 『おうちができたよ』

【クラスで大切にしていること】

- ・個々の発達段階を見極める。
- ・子ども達の「今」の興味にある環境を整えた上で子ども達の自由な発想を見守り、次の環境や子どもの願いを保育者間で見取り合い、共有する。

保育室でのままごと遊びが盛んになり、気の合う友達と一緒にイメージをもちながら遊びを楽しむ姿が見られるようになってきたので、子ども達でも扱えるような段ボールのパーティションを遊びの素材として取り入れた。保育者のねらい通り、ままごとの場の仕切りとしてパーティションを使い、「家」や「お風呂」などのイメージをもって楽しむ姿があった。2週間ほど経ち扱いに慣れてくると、子ども達はパーティションを立てるだけでなく、置き方や曲げ方を工夫して遊び始めた。平置きにし、ぐるりと頭の上を通すと家のようになる。A児「お家ができちゃった」B児「いれて」A児「いいよ。ちょっとせまいけどな。ここもってなあかんねん」(屋根の部分は背中や頭で押さえ、連結部分は手で押さえないと崩れてしまう)B児も家の中に入る。見に来た友達にA児「ちょっとせまいからな。もう入れないの」と声を掛けた。手が疲れて屋根が外れてしまう。A児「疲れた～」とB児と顔を見合わせ笑っていた。

(考察)

- ・子どもの自由な発想を大切にすることで、保育者が予想しなかった使い方へと発展した。
- ・この子どもの姿からパーティションの枚数を増やしたり、様々な長さの物をつくったり、自立しやすいようなおもりをつくったりと子ども達の「今」に合わせることで、子ども達がイメージしたものを実現できるようになっている。

4歳 7月 『ふね、うかべたい！』

【クラスで大切にしていること】

- ・子どもの「やってみたい」の気持ちに寄り添い、自由に試せる環境を大切にしている。
- ・友達とかかわって遊ぶ楽しさや心地良さが伝わるように保育者はそばで見守り、必要に応じてさりげなく声をかけたり、励ましたりしている。

砂場につくった川に、自分で製作した船を浮かべるのを楽しんでいた子ども達は、船製作を通して「水に強い箱はなんだろう？」と素材の違いに少しずつ興味をもち始めていた。ある日、保育室の製作コーナーで船づくりをしていたA児とB児は、発泡スチロールの船の上に、紙でつくった人形や旗を立てて、「ふね、かんせーい♪」と嬉しそうな様子。「すてきな船ができたね！」と保育者が声をかけると、「これ、かわにうかべるねん！」とわくわくしながら話しかけてくる。「浮かべてみる？上に貼ってあるお人形(紙製)も水に強いかなあ？」と保育者が声をかけると、「つよいんちゃう！うかぶとおもう！」と自信満々だった。その後出来上がった船を写真に撮ってから、みんなで川に向かい、船を浮かべてみた。うちわで風をおこしながら船を進めることを楽しんでいる。しかし、次第に船に水が入り、船の上に貼ってあった人形や旗が濡れて破れてしまった。保育者はそっと二人の表情を見たが、A児とB児は「やぶれたなあ。」と言いつつも顔を合わせて笑っていた。「やぶれちゃったけど、船は浮かんだね。またつくってみようね。」と声をかけると「うん。」と答えた二人。結果的に紙でつくった人形や旗は破れてしまったが、保育室に帰ってから二人で船を修理し、次は紙を使わずに油性ペンで発泡スチロールに直接絵をかく姿があった。次の日からは、保育者と一緒に水に強い素材と弱い素材を考えたり、新たに大きな船をつくったりと、さらに盛り上がりを見せた船づくりだった。

(考察)

- ・子どものやってみたい気持ちに寄り添い、自由に試せる環境を整えておいたことで、素材の特性が分かり、製作活動への意欲もさらに広がった。
- ・残念ながら紙が水に濡れて破れてしまったが、友達と一緒につくっていたことや保育者が気持ちに寄り添ったことで、笑い合う姿に繋がった。

5歳児 9月「水を入れたら本物みたいになるかも!？」

【クラスで大切にしていること】

自分達で遊びを進めたり、思いの伝え合いができたりするようにすぐに介入せず見守る。必要に応じて保育者がさりげなく手伝ったり、アイデアを引き出したりすることで、やってみたい、試してみたいという気持ちを十分に満たせるようにする。

夏休み明けにお祭りごっこをして楽しんでいる。青く塗った空き箱を水槽に見立て、その中にペットボトルのキャップを入れて、金魚すくいごっこを楽しんでいる。画用紙でつくったポイを持ち、「これ本物みたいに破れるようにしようよ」とティッシュを使ってポイの中心部をつくり直した。

遊びが盛り上がり始め、7名程の子どもが集まってきた。「ティッシュでつくってもあんまり破れへんなあ」「手で破る?」「それじゃ面白くないやん」「水についたら破れるかも」「じゃあ水使う?」「えー?どうやってするん?」「この空き箱の中に水入れてみるのはどう?」「いいやん!」というやりとりを、保育者は少し離れた場所から見守っていた。

「先生、水入れてみてもいい?」と保育者に聞き、「いいよ!」と返事をもらうと、数人で空き箱を持って水道に向かった。「どうなるかな?」「本物みたいになるんちゃう?」

「破れるかなあ」と楽しそうにワクワクした表情の子ども達。

水を入れた空き箱を慎重に机まで運び、そこにペットボトルのキャップで見立てた金魚を浮かばせる。みんなが見守る中、一人の子どもがティッシュでつくったポイで金魚をすくった。何度かすくったあと、ついにティッシュが破れると「やったー!」「破れた!」「大成功!」とみんな嬉ぶ姿が見られた。

(考察)

- ・「やってみたい」の思いを大切にしてきたことで、子ども達が自分達で考えて試そうとする姿に繋がった。
- ・子ども同士のやりとりを大切に、保育者が必要以上に介入せずに見守ってきた。そうしたことが、自分達で相談したり思いを出し合ったりできる姿に繋がった。

## 5. 研究の成果

- ・保育者が困っている場面に絞って話し合うことで、具体的な保育内容や進め方などの提案をし合う機会をもつことに繋がった。
- ・保育者が子どもの遊びや生活にどのようにかかわるべきか、そのかわりが子どもの発達に与える影響について、新しい知見を提供することが期待される。また、保育者の教育や研修における指導方法の改善にも繋がった。

## 6. 今後の課題

- ・遊びや子どもの発達において、非常に重要な要素であるが、保育者のかかわり方次第で、遊びの質が大きく変わる。保育者がどのように遊びをサポートし導くべきか考えられることが求められる。
- ・職員間で共通理解した目指す子どもの姿をもつことで、研究の目的を更に定め、遊びでの多様性を保ちながら保育者がそれぞれの遊びにどうかかわり支援するかを深めていきたい。